演劇で生きる力を磨く！
令和キッズの学び方

皆さんは仕事や家庭など日常のさまざまな場面で、自分と異なる意見が出たときに、その意見を聞き、相手を思いやりながら自分の考えを伝えることで、より良い関係づくりができた経験はありませんか？

このような力を育むため、宝塚市では令和4（2022）年から市内全ての小学校5年生または6年生を対象に、演劇を取り入れたコミュニケーション教育「自己表現力向上事業」を実施しています。

演劇教育がもたらすもの

授業では、日本を代表する劇作家の一人で、文部科学省のコミュニケーション教育推進会議の座長を務めた平田オリザさん考案の演劇ワークショップ方法論に基づき、3分程の短い劇を演じます。子どもたちは、お互いに意見を出し合って議論する楽しさを知り、相手の意見を聞く力を養います。

また、少人数に分かれて実施するため、一人一人がそれぞれの役割を担う中で「自分がグループの役に立っている」「自分はグループに欠かせない存在だ」という実感を得ることができます。他人との関係の中でこのような感情を抱く経験は、社会性を身に付けることにつながります。

また、演劇ワークショップは学力テストのように一律の基準で採点されることはありません。もし時間が足りずに思うように劇ができなくても、自分たちなりに工夫したことや努力したことなど、結果ではなく過程を大人やクラスメイトに認められ、褒められることで、難しい課題に挑戦することへの恐怖が薄らぎ、失敗を糧にする力が生まれます。

このような生きる力を身に付ける演劇ワークショップがどのように行われているのか、授業風景を見てみましょう。

教育委員会教育研究課
（☎84・0946 FAX85・2281）

授業のスケジュール（一例）

START!

❶ 台本配布・練習

テーマは「クラスに転校生がやって来る」。1グループ5～6人に分かれて演技を練習。配役や喋り方は、子どもたち自身が考えます。

喋り方を工夫してみよう！

先生らしい言葉遣いって？
小道具がなくても、話し方を変えるだけで先生らしく見えるよ。だから言葉遣いを学ぶのって大事なんだ！

全員が楽しく出演するには…

配役でモメちゃった…
全員が納得するまで配役を相談してたら練習時間が足りない！丁寧な話し合いと時間配分のバランスを意識しないと。

❷ 上演1回目

劇のルール
演者：照れ笑いは我慢して、演技をやり遂げること。
できるだけ顔を上げて相手を見ること。
観客：拍手や笑いなどリアクションはOK。ただし、私語は厳禁。

表現力と理解力
自分の表現がどう伝わるか、相手がどんな事を伝えたいのか、客観的な視点を持つのは難しいけど大切なんだね。

笑わせるって難しい！

楽しいのは自分だけ？
面白いと思ってアドリブを入れすぎたら、周りのみんなが困っちゃった。自分の楽しさだけじゃなくて、グループ全体の事を考えなきゃ。

❸ 講評1回目

講師はプロの舞台役者。1グループごとに良かったところを発表します。
上手くいかなかったところは改善方法を具体的にアドバイスし、どうすれば良くなるか全員で教わります。

❹ 練習2回目

台本の大まかなあらすじは変えずに、自分たちでセリフや細かい設定を創作。正解のない課題と向き合い、たくさんの事をグループ一丸となって考えます。

意見が対立した時は
どちらかが我慢するしかないと思っていたけど、お互いの意見を組み合わせたら、さらに良い案が生まれたよ。

失敗から学べ！
1回目に上手くいかなかった所に注意して、今度はもっといい劇にするぞ！

❺ 上演2回目

1回目の反省を生かして、演じ方を改善。最初はセリフを追うので精一杯だった子どもたちが、小道具や身振り手振りを使って演じます。

時間内にみんなの意見をまとめるのは大変！！

言葉だけじゃなく全身で表現しよう！

❻ 講評2回目

FINISH

時間の使い方や話し合いの仕方など、授業で得た気付きをおさらい。最後は「一本締め」に初挑戦し、ちょっぴり大人の気分です。

演劇って楽しい！
自分が考えたことを表現したり、ミスをみんなで乗り越えたり、何か一つの事をやり遂げるって、こんなに達成感があるんだ！

授業を受けた感想は？

台本を作るときには一人一人の意見がぶつかり合うことがあって、それが一番難しかったけど、大人になるまでに学んでいけたらいいと思った。

最初は楽しいだけとしか思っていなかったけど、班のみんなといろいろ話し合っていくうちに、自分の意見を伝える大切さに気づきました。

話し合いはそんなに好きじゃないけど、今回はとっても楽しかったです。

今回初めて自分たちで台本を作ってみて、どうするか分担した。すれ違いがあって大変だったけど、おもしろいものができたと思います。

自分がおもしろいと思ったことでも客観的に見ればすべってしまうこともあるので、難しいなと思いました。

小学5年生の感想文より

宝塚市が目指すもの

変化の激しい現代社会を生きる子どもたちにとって、課題解決に向けて他者と協働するコミュニケーション能力や、それによって得られる自己有用感（自分が誰かの役に立てているという感覚）は非常に重要なものとなっています。これらは非認知能力と呼ばれ、幼児期から学童期に育ちやすいと言われています。

市は、子どもたちの非認知能力を育むために有効な演劇ワークショップを平成26（2014）年度に小学校3校で導入し、令和4（2022）年度から市内全小学校で実施しています。授業後の感想には、人とコミュニケーションを取ることに前向きな意見が多く見られます。また、令和4年度に国が行った全国学力・学習状況調査でも、「自分と違う意見について考えるのは楽しいか」「友だちと協力することは楽しいか」などの質問に肯定的な回答をする割合が、本市は全国平均と比べて高くなっています。

今後も子どもたちの「生きる力」を育む取り組みを進めていきます。

Interview

小学校から大学まで、全国各地の教育現場で演劇ワークショップを実施してきた平田オリザさんに、演劇教育の効果や魅力を教えてもらいました。

平田 オリザさん

劇作家・演出家、宝塚市政策アドバイザー。

―演劇教育はどんな力が身に付きますか？

現在、演劇教育の中で最も注目されているのは「他者理解」です。これは単なるコミュニケーション能力ではなく、異なる文化、異なる価値観を持った人の言動を理解する能力を指します。これから日本型文化共生型の社会になっていくときには、最も必要な能力ともされています。

―演劇ならではの強みとはどんなものですか？

多くの子どもに居場所が作りやすい点だと思います。私は小学校の先生方には、声の小さい子には無理して大きな声を出させないでいいですよと伝えています。声の小さい子は、「声の小さい子」という役をやらせれば一番うまいからです。

―今後の演劇教育の目標は？

一つは小学校の国語や道徳、総合的な学習の時間に演劇的手法が幅広く使われていくこと。もう一つは諸外国のように、高校の選択必修に「演劇」という科目が入ることです。

―子どもの「生きる力」の成長を見守る大人へメッセージを

子どもは一人一人さまざまです。コミュニケーション能力を上げる特効薬はありません。演劇ワークショップが、子どもの心を開く一つのきっかけになればと思います。